

第 6 章

結語

本章では，本論文のまとめとして，これまでの第 1 章から第 5 章までの内容のまとめとする．

本研究においては、運動経験がもたらす情動知能への影響をテーマとしてきた。

大学生の2年間の縦断的な調査からは、特に3年生になった時点での情動知能得点全般で有意な向上が示された。また、運動部所属群よりもその他の所属群がEQS合計点と対人対応領域得点が有意に高い結果となった。しかし、その他の所属群においても部活動以外で運動を継続している学生もいることや運動を全く行わないような他学科の学生との比較検討も今後の研究として求められる。

また、大学生を対象とした過去の運動経験からの回顧的な調査からは、現在の運動経験のみならず、過去の運動経験を広く捉え、大学生の頃の情動知能得点にどのような影響を与えているかを検討した。その結果、男子と女子では、運動経験の年数や熱心さなどの要因が与える影響は異なり、男子の方が小学校から中学、高校へと上がるにつれてその運動経験要因は大きな影響を示すことが明らかになった。また、運動経験があるかどうかといった所属の要因では、中学、高校、大学よりも小学校の頃に運動経験があったかどうかは男女ともに大学生の頃の高い情動知能得点に関連を示していることが新たな知見として得られた。

児童期の運動経験に着目し、運動系の習い事と、その他の習い事について検討した結果からは、運動系の習い事の要因が情動知能と相関を示し、運動以外の活動では得られない要因が運動経験にはあることが示された。また、小学校の低学年と高学年の比較からは、自尊感情が未発達な低学年においては、自分自身の情動知能を過大評価し、他者評価との一致を示さないのに対し、高学年になると自分の情動知能を正しく理解し始め、他者評価との一致を示す成長の過程を示す結果となった。運動経験の要因の面からは、低学年では、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事が情動知能の中でも、自己対応領域や、気配り、目標追求への意識を高めることが明らかになった。また、高学年においては、運動系の習い事を多く経験することや、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事を多く経験することが、情動知能の中でも協力、楽天主義、人材活用力への意識を高めることが明らかになった。また、児童期の運動教室による短期縦断的な調査からは、運動能力や目標が異なる運動能力のレベルや熱心度により、運動経験要因と情動知能の得点への関連は異なることが明らかになった。これは、運動能力の変化とともに、自分自身の動機づけや、その集団での自分の社会的地位などが変化することにより、情動知能への関連も異なってくることが考えられる。

運動系の習い事による情動知能への影響を明らかにすることができたが、体育の好き嫌いや、得意不得意によって経験の差ができてしまうことが考えられるため、全員に共通に与えられる運動の機会として、体育の授業に着目した。その中で、体育の専門教員ではないことが多い体育の授業において、教員側の指導の際の意識が重要であると考え、教員の体育の授業における情動知能や指導法への意識を検討した。指導歴と性別による検討から、指導歴中期間の男性教員が短期間の男性教員よりも有意に高く、指導歴中期間の教員の中では女性よりも男性の方が指導に対する有意に高い意識を持っていることが明らかになった。さらに今回の調査対象者は、性別や指導歴による差ではなく、個人の意識の差が影響し、体育の授業によってコミュニケーション能力を効果的に育むことができると意識しており、情動知能と指導法、コミュニケーション能力の効果的な向上への意識には、正の相関が認められた。

これらの調査結果から、研究が少なかった運動経験と情動知能の関連として、回顧的、縦断的な検討から新たな知見が得られた。また、大学生を対象とした研究が多くみられた先行研究の中、児童期の情動知能の変化や運動経験との関連が明らかにされたことは、本研究の大きな成果であると考えられる。今後、中学生や高校生を調査対象とし、思春期の運動経験と情動知能の関連についても、より具体的な要因を明らかにしていく必要がある。また、研究方法としても、調査対象者の人数を増やすことや統制群を設けた検討を行っていくこと、更なる長期の縦断的調査などから、運動経験が情動知能の効果的な向上につながることを、より具体的に明らかにしていくことが求められる。それらの研究結果は、コミュニケーション能力の低下が問題視される今日において、体育という教育の一場面を用いて、情動知能を効果的に向上させていく指導法を開発していく一助となると考えられる。